

ローカルな視点での食料安全保障 ～解決は地域から、自分事としての意識を～

ながれ

飯野 恵理 (いいの えり/つくば飯野農園)

身近に農のある暮らしの大切さ

私たち夫婦が農業を始めたのは2012年の春、きっかけは東日本大震災でした。原発事故の混乱時には、スーパーなどから食料や生活必需品が消え、必要な食べ物が手に入らなくなることを生まれて初めて経験しました。結婚前で実家暮らしだった私は、家族のために町役場の食料配給の列に並んでおにぎりとお水をもらい、祖父の畑からほうれん草を採ってきて石油ストーブの上に置いた鍋でほうれん草を茹でて家族で食べました。私は身近に農があり食料をつくれることがどれだけ大事かに気づき、食料安全保障について、よりローカルな視点で考えるようになりました。

震災の翌月に結婚のためにつくば市に引っ越してきてからは、自分たちで小さな家庭菜園を始めました。暑い夏の日にはゴロゴロ雷が来たと思ったら夕立が来て、ザアッとひと雨降った後は澄んだ空気がひんやりと涼しくて、二人で「夕立って気持ちが良いね」と話していたのを覚えています。収入の少なかった私たちには家庭菜園の野菜が生活の頼り、夏の間毎日なるナスやキュウリ、霜が降りるまでなり続け私たちの食を支えてくれたピーマンに感動し、自然のありがたさを素直に感じることができるようになりました。

そして本格的に農業を生業とする道を選び、震災の翌年に独立就農。農薬や化学肥料を一切使わずに、少量多品目で伝統的な品種の野菜を地域の伝統農法で育てる家族経営の小さな有機農家になりました。

今はCSA-Community Supported Agriculture (地域支援型農業)を行い、人と人がリアルにつながり人間らしく生きていく食と農を目

指す活動をしています。

都市開発と太陽光発電の影響

就農してから10年が経ち、周りの環境は大きく変わりました。ここは市街化調整区域・農業振興地域であっても、特例により畑はどんどん宅地として売られ、住宅地として開発が進んでいます。一般住宅が建ち並び、農業がやりにくい環境になりました。周囲の畑の地主たちは、土地が宅地として高い値で売れるので、だれも私たちに農地を貸してはくれません。

少し離れた別の畑(夫の両親の畑)は、開発ができない地域のため一般住宅は建たないのですが、2020年から周囲の林がどんどん伐採されて、説明も無いままにあっという間に太陽光発電のソーラーパネルが設置されてしまいました。周囲の土地持ち非農家は耕作放棄地の解消のために太陽光発電を選んだのですが、森林伐採を伴うソーラーパネルの設置はそのまわりで農業を行うものにとっては大きな問題です。

私たち夫婦はアグロエコロジーの考え方(先人たちの知恵を活かした地域や気候に合った伝統的な農法)を取り入れています。それには太陽光発電のために伐採されてしまった隣地の林の存在がとても重要でした。夫の両親はもう何十年もの間、その林の木々の陰になる場所で自家用のサトイモやショウガなどの日射しに弱い作物を育ててきました。私たちは親世代からそういった地域の伝統農法を教わり、それを受け継いできましたが、その林が無くなってしまい、もうそこでサトイモやショウガを栽培することが難しくなっていました。真夏の強い日射し

とソーラーパネルの照り返しで、サトイモの葉がチリチリに焼けてしまい、保水力も失った畑ではサトイモもショウガもうまく育ちません。気温・地温・湿度の調整ができない灼熱の土地で、今後は何を育てることができるのか、頭を悩ませています。暑さ・日射し・乾燥に強い作物に転換するしかありません。

また、林では様々な植物が多種多様に存在することで虫や野生動物などの生態系が維持されてきましたが、林がなくなれば野ウサギ・野鳥・小型のタカも住処を失います。

世間ではメガソーラーの乱立による環境破壊や災害は大問題になりますが、こういう小さな面積での問題は、個人の自由として地主や設置者の権利が主張されるばかり。周囲の農業や日常生活に影響がでて、電磁波による健康被害がでて、なかなか理解してもらえません。

今年もまたひとつ隣接する林が無くなり、まもなくソーラーパネルの設置工事が始まろうとしています。私たちは地域単位で環境と生活をどう守っていくか、皆でもう一度よく考えていくことが早急に求められています。

夏の雨と冬の雪がなくなった

つくばエクスプレス沿線では10年ほど前から急速に大規模な都市開発が進み、広大な面積の森林が伐採されてきました。土地の保水力が無くなると、風の流れが変わります。雨雲の通り道が変わるのです。

私たちが農業を行う地域は、その大規模都市開発前は夏にちゃんと夕立が来ていました。夫は地元民なので、子どもの頃はもっと頻繁に夕立が来ていたと言います。それが7～8年前あたりからは夏の夕立が無くなりました。雨雲レーダーを見ると、雨雲が近づいてきても、ここはいつも雨雲の通り道からギリギリのところまで外れて雨が降らないのです。2km西・2km北は毎回雨雲が通るのに、なぜここだけ避けていくのか、毎年悔しくてたまりません。

それにより5年前からはニンジンを栽培することが難しくなりました。真夏の一番暑い時期に天気予報とにらめっこをして雨のタイミングを見計らって種まきをして、夕立の雨で発芽するように栽培していましたが、もう伝統的な農法では太刀打ちできない状況になってしまいました。灌水設備が無いとニンジンは栽培できません。

冬には雪が降らなくなりました。もともと雪は少ない地域ですが、1980年代まではシーズンに4～5回は雪が積もっていたそうです。今は1回降るかどうか。冬の土の乾燥がひどくなり、筑波おろしの強風で畑の土が削られて失われていきます。長年過剰に化学肥料を投入して団粒構造が失われた土はなおさらです。

気候危機には地域目線での対応を

自然界は暦（二十四節気・七十二候）通りに動こうとしていますが、私たち夫婦は農業を通して確かに環境と気候がおかしくなっていると感じています。特に夏の気候が年々厳しくなっています。

この問題は専門家や国の政策に任せているばかりでは解決できません。地方自治体やもっと小さな地域レベル、個人レベルでものごとを考えアクションを起こしていくことが重要です。

開発利権で動く政治家がいるとしたら、私たち地域住民はそれに対して待ったをかけることができます。「いまだけ、カネだけ、自分だけ」の市場原理主義にNO！と言い、自分たちこそが地域の環境と食と農、そして命を守っていくのだと自覚することが大切です。食料安全保障（自給できること）が国家の要であり、それが私たちの健康と命に直結しているということを忘れてはなりません。

食料も環境も人任せにしない、自分でつくりあげていくという意識を地域の皆が持つときです。ひとりひとりの意識の変化が、大きな変革をもたらすと信じています。